

埼玉県指定史跡

八幡山古墳石室

SAITAMA PREFECTURE SPECIFICATION CULTURAL ASSET
STONE CHAMBER OF HACHIMANN' YAMA MOUNDED TOMB

行田市藤原町の富士見工業団地内にある八幡山公園の一角に
“関東の石舞台”^{いしぶたい}とも呼ばれる巨大な横穴式石室を持つ
八幡山古墳があります。

この八幡山古墳は、今から約1400年前の古墳時代に築かれた権力者のお墓です。

その巨大な石室は、圧倒的な存在感があり、

この古墳を築いた権力者の持っていた強大な力を誇示しているようです。

この古墳を築いた権力者は、いったいどのような人物だったのでしょうか？

どうしてここに、このような巨大な石室を持つ古墳を築いたのでしょうか？

そして、本来は古墳の中に築かれる石室が、なぜ露出しているのでしょうか？

八幡山古墳石室が物語る古代の歴史ロマンを、

ぜひ石室内部に立ち入って、体感してみてください。

【石室公開日：土・日・祝日の10時～16時】



若小玉古墳群と八幡山古墳

八幡山古墳は、若小玉古墳群の一角に築かれた大型円墳で、石室に八幡社の石祠が置かれていることからその名が付けられたようです。

若小玉古墳群は、現在では八幡山古墳と地藏塚古墳の2基が県指定史跡として保存されているだけですが、発掘調査等で5世紀末頃～7世紀中頃に40基以上の古墳が富士見工業団地付近の長野落し北側台地上に築かれていたことが判明しています。行田市内では埼玉古墳群に次ぐ規模をもつ古墳群で、埼玉古墳群を築いた権力者を補佐した権力者が築いた古墳群と考えられています。

なお、八幡山古墳の約2 km北方には国指定史跡小見真観寺古墳が、約1.6 km南方には同じく国指定史跡埼玉古墳群が存在しています。

八幡山古墳石室の発見と保存

八幡山古墳は、現在その巨大な石室が露出していますが、かつては9.5 m程の高さの墳丘盛土があり、石室は墳丘の中に築かれていました。江戸時代後期には既にその存在が知られていて、『新編武蔵國風土記稿』、『増補忍名所図会』等に八幡山古墳のことが記されています。

『増補忍名所図会』には「浅間山」と記されていて、その記述によると、当時すでに石室の一部が露出していたようです。

昭和9年(1934)11月に八幡山古墳の約1 km南東にあった小針沼(現在の行田浄水場)の干拓事業が始まり、三方塚古墳、愛宕山古墳等当時残っていた若小玉古墳群の多くの古墳が崩されて、その土が沼の埋め立てに使われました。八幡山古墳も崩されて、翌年1月までに墳丘盛土の大半が取り去られ、巨大な石室が姿を表わしました。その時点で事の重要性に気づいた当時の太田村村長が埼玉懸史編纂掛に調査を依頼、同年5月に発掘調査が行われました。そして昭和19年3月31日付で、石室部分が「八幡山古墳石室」として埼玉県指定史跡に指定され、保存が図られました。

その後周辺に富士見工業団地が造成され、八幡山古墳は石室の周辺部だけが八幡山公園の一角に保存されて来ました。しかしながら風雨で石室の損傷が進んだため、昭和52～54年に石室の復原工事が行われ、現在の姿に復原されました。



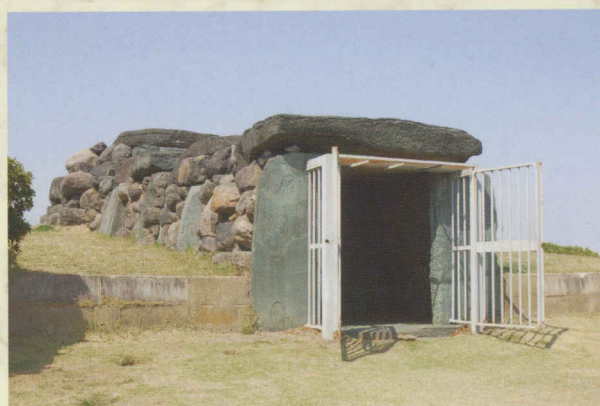
墳丘盛土が崩される以前の八幡山古墳

墳丘盛土が崩される以前の昭和初期頃の八幡山古墳です。
(太田公民館提供)



復原工事前の八幡山古墳石室

(埼玉県立さきたま史跡の博物館提供)



現在の八幡山古墳石室



石室内部

手前から羨道、前室、中室、奥室と続いています。



銅鏡(左)と須恵器長頸壺(右)

銅鏡は銅を主体に鉛とスズを混ぜた佐波理と言う合金で作られています。仏壇に置いてある鈴のような形をしていて、底には同心円の模様が刻まれています。

須恵器長頸壺は7世紀中頃に現在の静岡県湖西市にあった湖西窯で作られたものです。

(埼玉県立さきたま史跡の博物館提供)



青銅製八花形棺金具(手前中央)と塗漆木棺片

青銅製八花形棺金具は、棺に付けた飾り金具です。

漆塗木棺は、木の棺の表面に絹の布を十枚重ね、その上にベンガラを塗り、さらに透漆膜で保護して精巧につくられています。(埼玉県立さきたま史跡の博物館提供)

銅漆装方頭把頭①

金銅装鞘尻金具②

銀製弓筈金物片③

鉄鏃④



(埼玉県立さきたま史跡の博物館提供)

八幡山古墳と石室の概要

八幡山古墳は、昭和10年の発掘調査以降、計4回発掘調査が行われています。その調査成果等から墳丘の直径が80mの円墳で、周溝は存在しない可能性が高いと推測されています。

古墳の墳丘北側はローム台地上に築かれていますが、南側は台地から外れた後背湿地に築かれています。墳丘は、粘土とローム土を5~10cmの厚さで交互に重ね、部分的に黒色土を混ぜて硬く突き固める版築がされています。

石室は、羨道、前室、中室、奥室で構成されている推定全長16.7m、奥室の横幅4.8mの巨大な横穴式石室です。現在は羨道の大部分が失われていて、現存長は約14.7mです。石室の平面形は、奥室が隅丸方形、中室が胴張り形、前室が方形をなしています。

石室の構築法は他に例のないもので、奥室の壁は、角閃石安山岩と輝石安山岩質溶岩を用い、断面形が六角形の切石を積み上げ、目の通りをさけるために断面形が台形の切石を挟み込んでいます。中、前室の側壁は中央部に緑泥片岩の板石をすえ、両面を角閃石安山岩と輝石安山岩質溶岩で断面六角形に加工して組み込み積みをしています。いずれも側壁の石積みは版築土下面まで続いています。また、各室とも両側壁から平面T字形に板石を立て入口としています。床面は、各室とも中央部に二枚の緑泥片岩を置き、その周りを砂質凝灰岩の方形切石を各コーナーに傾斜するように敷き詰めています。床面下にも15~20cmの版築の下に角閃石安山岩の方形切石を長軸方向と中央部を横位にクロスさせ控え敷きしています。天井には厚さ40~74cmの巨大な緑泥片岩が使われています。

副葬品は、フラスコ形の須恵器長頸壺、銅鏡、青銅製八花形棺金具、直刀片、乾漆器片、夾紵棺片、漆塗木棺片及び銅鏃、鉄釘、銀製弓筈金物片、鉄鏃、銅漆装方頭把頭、金銅装鞘尻金具が出土しています。特に漆塗木棺片は東国では他に千葉県栄町の竜角寺浅間山古墳で出土しているだけで、その他の出土例が攝津・河内・大和地方の天皇・皇子やそれに準ずる高貴な人や政治的に高位の人の墓にほぼ限られていることから注目されています。なお、これら副葬品の年代と石室の構造等から、八幡山古墳は7世紀前半~中頃(第2四半期頃)に築造されたと推測されています。



万葉遺跡・ 防人藤原部等母磨遺跡

八幡山公園付近は、埼玉県指定旧跡万葉遺跡・防人藤原部等母磨遺跡となっていて、公園入口には、等母磨夫妻の歌を刻んだ万葉歌碑が建立されています。

八幡山古墳の被葬者

八幡山古墳石室には、榛名山麓の角閃石安山岩、荒川上流域の緑泥片岩、比企丘陵地域の砂質凝灰岩など広範囲に渡る複数の地域の石材が豊富に使用されており、八幡山古墳を築いた人物は、それら広範囲から石材を調達出来た権力者であったと考えられます。

八幡山古墳が築かれた7世紀前半には、すでに前方後円墳は築かれなくなっており、古墳は小型化していきます。そうした時代の中で、八幡山古墳は抜きん出た規模を誇っています。また、この頃には埼玉古墳群の築造は終わりを迎えつつあり、八幡山古墳の築造は、埼玉古墳群を築いて来た権力者一族や、小見真観寺古墳を築いた権力者に代わる強力な権力者が、若小玉古墳群を築いて来た一族から出現したことを示していると思われる。

では、八幡山古墳を築いた権力者は、誰だったのでしょうか？その有力な候補者と考えられているのが、平安

時代に記された聖徳太子の伝記『聖徳太子伝暦』^{しやうとくたい しでんりやく}に登場する聖徳太子の舎人、物部連兄麿^{とねり もののべのむらじえまる}です。『聖徳太子伝暦』によると物部連兄麿は、近江の膳臣清國^{かしわでのおみきよしく}と共にいつも聖徳太子の側に仕えていました。仏教を信仰する聖徳太子の影響を受け、社会道徳を守って修行を積み、出家しない仏教信者の優婆塞となりました。そして、永年の功績が認められ、舒明天皇5年(633)に武蔵国造^{むさしのくにのみやつこ}となり、後に小仁の位を賜ったとあります。

後世の伝記である『聖徳太子伝暦』の信憑性に疑問も持たれていますが、仏具の銅鏡、畿内の貴人が用いた漆塗木棺の出土、寺院建築の基礎固めの技法である版築の採用、石組・切石技法等他に見られない新しい技術を用いた巨大な石室の構築等、八幡山古墳は兄麿の墓にふさわしい畿内政権の中核との深い関わりが伺える、当時の先端技術と仏教文化を取り入れて築かれた古墳なのです。

八幡山古墳へのアクセス

<JR高崎線> 行田駅より市内循環バス南大通り線コース「工業団地」行きで終点下車徒歩5分

<JR高崎線> 吹上駅より朝日バス「工業団地」行きで終点下車徒歩5分

<秩父鉄道> 行田市駅より市内循環バス東循環コース「藤原町1丁目」下車徒歩10分

【八幡山公園駐車場】公園西隣

大型バス3台、乗用車6台駐車可能

所在地：行田市藤原町1-27-1

ホームページ：http://www.city.gyoda.lg.jp/41/03/10/bunkazai_itiran/hatimanyamakofunsekisitu.html



*団体見学の場合には、事前にご連絡を頂ければ公開日以外でも石室見学が可能です。お問い合わせ下さい。

●八幡山古墳石室見学等についてのお問い合わせ● 行田市教育委員会文化財保護課 Tel.048-553-3581

編集・発行 行田市教育委員会 平成26年3月